

2010年度 リーディング・ユニバーシティ募金による「地域リーダー育成」助成金
活動総括

2011年3月7日
曾士才・高柳俊男

<テーマ>

地域の実情に即した国際交流を担えるリーダーの育成～長野県飯田市を舞台に

<目的>

本研修の目的は、申請書に述べたとおり、海外でのSA留学で異文化を実体験した国際文化学部3～4年次生が、その経験も活かしつつ、地域の歴史・文化を踏まえた国際交流を担える地域リーダーとして成長できるよう、現地での実習を行なうことにある。

その研修地としては、戦前、満州移民を数多く送り出した関係で現在多くの中国帰国者を抱え、また近年はブラジルやフィリピンなどからの外国人の流入により、市として「外国人集住都市会議」にも参加して多文化・多民族共生を模索している、長野県の飯田・下伊那地域を選んだ。

また、国際文化学部では2012年度から、この地域で外国人留学生を主対象に「S」国内研修を予定しており、そのプレ研修的意味合いも込めている。

<計画・実施内容>

まずは、ゼミ生の中から参加希望者に名乗り出てもらい、最終的に4名を選出した。次いで教員の側で、A4で50枚におよぶ「見学の手引き」を作成し、それに基づいて事前学習の場を1度もった。そのうえで、以下のスケジュールで3泊4日の現地研修を実施した。

日付	学習内容	午前	午後	夜	備考
1 9/6 月	移動（飯田線の乗車体験も） 市内見学	8:33 東京駅発の新幹線にて豊橋経由、飯田線乗車で現地へ	市内見学(満蒙開拓青少年義勇軍の慰霊碑、リング並木、川本喜八郎人形美術館などの見学)	「満蒙開拓平和記念館」建設運動の事務局長、寺沢秀文さんと夕食	宿は3泊とも「ホテル弥生」
2 9/7 火	講義受講と託老所「ニイハオ」訪問	9:30～ レクチャー① 飯田市多文化共生係担当（飯田市の外国人政策や国際交流の現状）	14:00 宅老所「ニイハオ」訪問と交流 ケーキ店「トップ」のオーナーと交流（予定外）	宿舎にて、合唱劇『カネト』DVD鑑賞	
3 9/8 水	講義受講と農業体験	9:30～レクチャー② 飯田市歴史研究所担当（飯田・下伊那地区における満州移民）	13:30 南信州観光公社の斡旋による阿南町での農業体験(中玉トマトの収穫と袋詰め作業)	飯田市歴史研究所の皆さんとの夕食会	午後の阿南町へは、アップルキャブのジャンボタクシーを貸し切り
4 9/9 木	隣接町村見学 帰途	大平宿見学 妻籠の伝統的な街並み散策、旧読書村の満州移民慰霊	熊谷元一写真壁画記念館見学、長岳寺訪問（阿智村）	16:04 飯田駅発の高速バスで新宿（解散）	終日、アップルキャブのジャンボタクシーを貸し切り

		碑見学（南木曾町）	※山本慈昭記念館はカギの管理者が不在で見学できず		
--	--	-----------	--------------------------	--	--

これを研修内容別に整理すると、以下のような形にまとめられる。

A：飯田・下伊那地域の民族関係の歴史

①飯田線建設史

- ・飯田線試乗
- ・朝鮮人土木労働者の存在への言及
- ・アイヌの測量師カネトの貢献（DVD『合唱劇 カネト』視聴）

②満州移民送出と戦後の中国帰国者

- ・飯田市歴史研究所員によるレクチャー
- ・「満蒙開拓平和記念館」建設運動の事務局長、寺沢秀文さんのお話
- ・中国帰国者向けにつくられたデイサービス施設「宅老所 ニイハオ」訪問と交流
- ・市内での満蒙開拓青少年義勇軍慰霊碑の見学
- ・南木曾町での旧読書村の満蒙開拓団慰霊碑、阿智村での長岳寺（前住職＝「残留孤児の父」と呼ばれた山本慈昭）見学

B：飯田・下伊那地域の国際化の現状

- ・氏原理恵子さん（飯田市企画部男女共同参画課多文化共生係長）による飯田市の外国人政策、国際交流のレクチャー

C：飯田・下伊那および周辺地域の文化と農業

- ・リンゴ並木をはじめとする市内見学
- ・川本喜八郎人形美術館見学
- ・南信州観光公社によるグリーンツーリズムについてのレクチャー
- ・阿南町での農業体験（中玉トマトの収穫と袋詰め作業）
- ・廃村を保存し、体験学習の場などとして活用している「大平宿」見学
- ・南木曾町妻籠での中山道の伝統的な街並み散策
- ・阿智村での熊谷元一写真童画記念館見学

<研修の成果と反省点>

今回の研修の成果として挙げられることは、以下の点である。

教員の側で、事前に情報を詳しく調べると同時に、研修受入れ団体の飯田市歴史研究所や南信州観光公社などと頻りに連絡を取って、研修の具体的な実施方法を綿密に相談した。その結果、歴史研究所員および市職員のレクチャー、ピニールハウス内での農業体験、関連文化施設訪問などにおいて、意義ある講義受講や実体験を積むことができた。とくに、「宅老所 ニイハオ」の訪問や、「満蒙開拓平和記念館」建設運動の事務局長から話を聴く場の設定は、すべて市側の斡旋を経ない独自ルートによる開拓であった。

学生たちも日頃のゼミでの学習や関心に引きつけて、飯田市の外国人の現状や政策を理解しようと努めたことが窺える。その一端は、2010年10月30日に行なわれた本助成金の「中間報告会」や、同12月7日に開催された国際文化学部内学会（国際文化情報学会）での共同報告にみられる。この点は、4年生は卒業後の就業を通じて、また3年生は来年度のゼミ活動のなかで、それぞれ活かされていくであろう。

とはいえ、報告書にも現われている通り、参加学生たちの関心は現状の特定分野（上記のB）の問題にほぼ限られており、今回の研修で掲げた「地域の歴史・文化を踏まえた国際交流」を担うという視点や、自然景観・街並み・農業体験なども含む多面的な内容に比して、不十分さは否めない。高校での科目選択制とも絡んで、この歴史的な視野の狭さの問題はいまの学生の多くに共通する弱点であるが、教員と学生たちとの都合が合わず、事前研修を出発2日前にしかできなかった日程上の問題とも関連しているものと思われる。

<今後の展望>

今回の問題点を克服する意味と、2012年度からの「S J国内研修」に向けてより多くのデータを確保する目的で、2011年度の夏に「プレ研修」第2弾をもう1度実施する。

今回は、事前研修の回数や時期に工夫を加え、「歴史を踏まえて現状をみる」という点でより明確な意識をもって研修に臨めるよう努めたい。また、実際に留学生（他学部生、大学院生）を参加者に入れて、留学生の目から見たこの研修の意義や問題点も測れるようにしたい。

現在考えている「プレ研修」第2弾の内容とスケジュールは、以下のようである。

月日	学 習 内 容	午 前	午 後	夜	備 考
9月 6（火）	飯田線乗車体験 市内の文化施設見学	飯田線経由で現地入り	飯田市立美術博物館（柳田国男館と日夏耿之介記念館を併設）、川本喜八郎人形美術館の見学 市内散策	満蒙開拓平和記念館建設運動を推進している寺沢秀文さん、または実際の満州移民体験者の話を聞きながら夕食	ホテル泊
7（水）	講義受講①	レクチャー①（飯田市の外国人をめぐる現状と政策） レクチャー②（飯田・下伊那地域の伝統文化と観光）	椋鳩十記念館（喬木村）、竹田扇之助記念国際糸操り人形館（飯田市座光寺）訪問	飯田市歴史研究所の皆さんと夕食	ホテル泊（計2泊）
8（木）	講義受講② 伝統工芸品制作体験 農家への民泊	飯田市公民館の「わいわいサロン」（日本語学習を通じた交流）の見学・参加 ※木曜限定	伝統工芸品制作体験（水引など）	農家に民泊	民泊する農家の所在地によっては、タクシーの利用ないし借上げが必要
9（金）	農業体験 観光地視察	宿泊した農家での農作業手伝い	天竜川沿い散策と川下り	中央道の高速バスで帰京	同上

（□は前回のプレ研修では実施できなかったこと）

第2回目の研修にあたって、この「リーディング・ユニバーシティ募金による『地域リーダー育成』助成金」を再度獲得できればいいが、できない場合を考慮して、「学部予算」を一定額確保して備えている。教員は引き続き、曾士才・高柳俊男が担当する。

「地域リーダー育成」助成金 最終報告

高柳・曾ゼミ

岩岡由季子・小見川友希・常葉崇文・松田えり

私たちは、2010年9月6日から9日にかけて長野県飯田市を訪問し、「地域の実情に即した国際交流を担える地域リーダーの育成」をテーマに研修を行った。飯田市とその周辺の下伊那地域は、過去に満州移民を多く送り出した地域であり、現在は帰国者とその家族が多く暮らしている。また、近年は日系ブラジル人を中心とした外国人労働者が増えており、外国人集住都市として注目される地域でもある。私たちは、ゼミで“日本の内なる国際化”をテーマに異文化理解や多文化共生のあり方について学んでいるので、飯田市での研修は、私たちの学びに大いに役立った。ここでは、飯田市での研修を通して、各人が思い感じたことや今後の抱負などを述べたい。また、飯田市における多文化共生や国際交流の推進に関するお話を聞いた中で、私たちなりに考えた飯田市への提言も抜粋して紹介し、助成金の最終報告としたい。なお、提言は去る1月末に高柳先生を通して飯田市でお世話になった関係機関に送った。

1. 飯田市での研修を終えて

岩岡由季子

飯田市役所男女共同参画課多文化共生係の氏原さんから飯田市における多文化共生社会の構築に向けた取り組みの状況を詳しく聴くことができ、卒業論文の執筆に活かすことができた。特に、飯田市において日本語教室がある学校では道徳などの時間に国際理解教育が行われており、日本語教室がない学校では外国人児童に対するいじめが起きやすいという実態を氏原さんから伺い、とても興味を持った。多文化共生社会を形成するにあたって、国境を越えた人々の移動の世界的な現状や、異文化理解や人権教育などを体系的に教える国際理解教育の実施の重要性を改めて感じた。飯田市での研修を終えた後は、多文化共生社会の構築や小中学校での国際理解教育について先行研究論文を多数読み、国際理解教育について理解を深め、「多文化共生社会の構築に向けた国際理解教育」というテーマで卒業論文をまとめることができた。また、飯田市における多文化共生社会の構築に向けた取り組みの現状を学ぶことにより、自分の住む地域にあまり関心や知識を持っていなかったことに気づいた。先行研究などを読み進めていく中で、自分の住む地域に暮らす外国人住民の数やその国籍、彼らに対する自治体の取り組みなどについて改めて知り、周りに暮らす外国人住民や地域の多文化共生の現状に関心を持つことにつながった。一市民として今後は、地域に暮らす外国人住民の生活を手助けするボランティア活動などにも積極的に参加していきたいと思う。

小見川友希

今回の研修では、外国人集住都市である飯田市の多文化共生に向けた取り組みの現状を、現場の方から聞いたことが一番の収穫であったと思う。男女共同参画課多文化共生係の氏原さんのお話は、地元で外国人住民を見かけることがほとんど稀である私にとって、そもそも外国人が共に地域社会をつくる住民であるという発想自体が新鮮であったと同時に、地域によってはこんなにも多文化共生の必要に迫られているのだということを感じさせられた。自分の認識以上に日本の国際化は進んでいると思えた。飯田市の外国人住民への対応は、現時点では十分なものとは言えないかもしれない。しかし、多文化共生を実現させるという意志をもって取り組みが開始されているというだけでも十分意義はあると思う。外国人に対して壁をつくってしまう人もまだ多いであろう日本で、市町村単位で外国人への理解を深め、受け入れていく姿勢、環境を整えていくことは子供からお年寄りまで対象になるので非常に有効であると思うし、今後ますます重要になってくることであろう。私は、卒業後は日本語教師という職を通して日本で暮らす外国人と接する機会がある。その人たちが日本で生活することをどう思っているのか、生の声をきいて、多文化共生社会を目指すにあたって何をすればいいのか、そして、私たちができることは何かを常日頃から考えていきたいと思う。

常葉崇文

飯田市での研修で、多くの外国人住民を抱える地域としての特徴や問題、またその対策として施していることなどのレクチャーを受けた。外国人という都市部や観光地を浮かべがちだが、地域に暮らす外国人住民はますます増加し、地域に目を向けるべきことを学んだ。住民の問題は様々であり、単に言語の対応をすればいいというものではない。住民として暮らすうえで、すべてのことに対して不自由は生じ、医療、教育、労働、住居など問題は様々である。飯田市を含む、外国人住民を多く抱える自治体が集まり、外国人集住都市会議を開き、外国人住民の生活などについて話し合い、また国への提言を行っている。政府の外国人住民に対する政策は十分とは言えず、その負担は外国人住民が実際に暮らす「地域」に押し掛かっている。また自治体や企業、学校などによって外国人への対応はまちまちである。外国人住民への対応や市民の意識の改善を広く働きかけるためには、まず国が中心になって動きはたらきかけていく必要がある。しかし、僕自身が国に働きかけるということは難しいものではあるが、個人でできることも重要なことである。そこで、日本に暮らす外国人住民と直に触れ合い理解を深めること、また独自に外国人への対応をする地域や団体から話をきき、その取り組みを理解し、深める方法などを考えていきたい。また移民国家といわれる他の国の例も学び、日本らしい多文化共生社会の在り方を考え、机上の空論とならないように、学生として自分にできることを実施していきたい。例えば、日本人と外国人が少しでも身近になれるようなイベントなど企画をしたいと思っている。

松田えり

私は現在、南米からの日系移民労働者の流入・現状をゼミで専攻テーマとしている。その中で、長野県飯田市だけでなく、外国人労働者が多く住む他の市町村や、集住都市会議加盟市町村などの取り組みについて調べてきた。神奈川県平塚市では外国籍住民を支援するボランティアやNGO組織が多数活躍し、市の窓口などを支えていることが分かった。たとえば、団地に住む各国の代表者と日本人の自治会長が組織する「国連部」というものがあり、問題解決を図ったり、日本の生活習慣についての話し合いなどを年4回行ったりしている。このように、民間レベルで外国人を支援する市民団体のある地域は、外国人住民を市民が受け入れる土壌が出来ており、外国人が住みやすい地域となっているのだと思う。さらに労働面でも企業側の努力が見てとれる。住居として、隣接している市のアパートを借り上げることや、有給休暇の充実、福利厚生施設の利用など、さまざまな企業努力を行っている。このような努力の結果、社員約100人中およそ7割の外国人労働者を雇うことができている。

飯田市を訪れ、多文化共生の現状を伺ったときに、すぐに母国へ帰ってしまうことや、国際交流がまだまだ希薄であることが問題点として挙げられていた。公民館の充実など飯田市ならではの活動を生かし、より外国人住民と飯田市民が近づける民間レベルでの取り組みを進めていくことを提言したい。

2. 飯田市への提言

私たちは、氏原さんのお話を聞いて、外国人住民や多文化共生に対する日本人住民の意識、外国人住民に対する市の対応、外国人労働者への企業の対応などを改善点と考えた。

多文化共生に向けた街づくりを進めるためには、外国人の生活支援だけではなく地域社会全体に広く利益をもたらすということを多くの住民が感じられるような機運を高める必要がある。そのためには、まず①外国人住民との交流事業推進（お祭りなど）や②国際理解教育の推進活動を進めることを提案したい。特に国際理解教育に関しては、日本語教室がある学校では道徳の時間などに行われているが、日本語教室がない学校では外国人児童に対するいじめが起きやすいとお話があった。各校のばらつきをなくすために市の教育方針に国際理解教育の内容を定めて、確実に実践できるよう整備するべきだと思う。また、外国人児童が通う学校とそうでない学校間で交流活動を図ったり、毎年米国ミズーリ大学から来る学生と地域住民との交流を促進したりすることを通して、外国人が市民にとってより身近に感じられるようになると思う。

この意識が生まれたのち、③役所において外国人住民に向けた窓口相談サービスなどを行っていることを住民に大きく告知し、④民間ボランティアと市の窓口との連携強化や⑤外国人の働く企業への補助などに取り組むべきであろう。

日本人住民にとって外国人住民が決して特異な存在ではなく、両者が対等に地域の活動に参画できることが、多文化共生社会として望ましい状態ではないだろうか。今年度は外国

人集住都市会議が飯田市で開催されるが、これは市の取り組みを広く住民に伝え、外国人住民の生活や外国人住民を抱える市の実情、彼らとの共生のために何をすべきかなどを住民に訴えかけ共に考える良い機会である。様々な文化背景を持つ外国人との共生を市が対処すべき「問題」として捉えるのではなく、外国人住民との共生が多様な文化をもった個性ある街づくりにつながるという意識を、外国人住民との交流や広報誌などを通じて住民に広め、飯田市が、今後日本が目指す多文化共生社会の先進的モデル地域に成り得るといふ認識を住民ひとりひとりが持つことが大切だと思う。

2010年9月6日から9日にかけて長野県飯田市を訪問し、飯田市の多文化共生と国際交流の推進について、男女共同参画課多文化共生係の氏原さんからお話を伺いました。その中で、外国人住民や多文化共生に対する日本人住民の意識、外国人住民に対する市の対応、外国人労働者への企業の対応などを改善点と考え、提言として以下にまとめました。

多文化共生に向けた街づくりを進めるためには、外国人の生活支援だけではなく地域社会全体に広く利益をもたらすということを多くの住民が感じられるような機運を高める必要があります。そのためには、まず①外国人住民との交流事業推進（お祭りなど）や②国際理解教育の推進というような活動を進めることを提案します。特に国際理解教育に関して、日本語教室が設置してある学校では道徳などの時間に実践されているということでしたが、日本語教室がない学校では外国人児童に対するいじめなどが起きやすいと氏原さんから伺いました。飯田市は満州移民を送り出した歴史を持ち、その帰国者が家族と共に暮らす地域であり、且つ日系ブラジル人やフィリピン人などのニューカマーも多く暮らす地域なので、これらの歴史や地域における人の移動を題材として国際理解教育に活かすことができると思います。そして、各校ごとの国際理解教育の実施のばらつきをなくすために市の教育方針に国際理解教育の内容を定めて、確実に実践されるよう整備するべきだと思います。また、外国人児童が通う学校とそうでない学校間で交流活動を図ったり、毎年米国ミズーリ大学から来る学生と地域住民との交流を促進したりするを通して、外国人が市民にとってより身近に感じられるようになると思います。

この意識が生まれたのち、③役所において外国人住民に向けた窓口相談サービスなどを行っていることを住民に大きく告知し、④民間ボランティアと市の窓口との連携強化や⑤外国人の働く企業への補助などに取り組むべきであると思います。

日本人住民にとって外国人住民が決して特異な存在というわけではなく、両者が対等に地域の活動に参画できるという状況が、多文化共生社会として望ましい状態であると思います。また、今年度は外国人集住都市会議が飯田市で開催されるので、この取り組みを広く住民に伝えることは、外国人住民の生活や外国人住民を抱える市の実情、彼らとの共生のために何をすべきかなどを住民に訴えかけ共に考える良い機会だと思います。様々な文化背景を持つ外国人との共生を市が対処すべき課題として捉えるのではなく、外国人住民との共生が多様な文化をもった個性ある街づくりにつながるという意識を、直接接触の場をもつ交流事業、また市の広報誌などをきっかけに住民に広め、飯田市が今後日本の目指す多文化共生社会の先進的モデルに成り得るという認識を住民ひとりひとりが持つことが大切だと思います。